

「大腸疾患の X 線・内視鏡診断と臨床病理」

癌研究会附属病院・副院長 武藤徹一郎

京都がん協会・副所長 多田 正大

東京大学教授・腫瘍外科 名川 弘一

京都第一赤十字病院消化器科・副部長 清水 誠治

編集

群馬県立がんセンター

長 廻 紘

日本の大腸病学はほとんどゼロからのスタートでしたが、今ではいくつかの分野で世界のトップクラスにあると言っても過言ではありません。大腸疾患の質的・量的な増加がその根底にありますが、この急速な進歩は、推進者たちの構想力・努力があって初めて可能でした。この度上梓された「大腸疾患の X 線・内視鏡診断と臨床病理」の編集者である武藤徹一郎氏(癌研究会附属病院)は評者の最も尊敬する同学の先輩であり、多田正太氏(京都がん協会)は、最も刺激を受け続けてきた同学の後輩です。この両氏こそは日本の大腸病学の強力な推進者であり続けた固有名詞と言っても過言ではありません。本書が取り扱う X 線・内視鏡診断、臨床病理こそは、東西、内科系外科系を代表する両氏が特に得意とされる分野で、その薫陶を受けた共同編集者名川弘一、清水誠治の両氏とともにその学派の俊英を総動員した、最適のグループによってなされた、との感を深くします。中国清朝の歴史学者、章学誠に「六経皆史」という説があります。中国の古典である六経(詩経、易経など)はすべて歴史の一種であるとの考えです。医学に携わる者にとって、日常行うすべてのことは医学に連なる、大腸を業とするものはすべてが大腸ひいては医学に関係するとするのは、章学誠の説をあながち曲解したことにはならないでしょう。両氏ならびに学

派の方々の日常からはそのような気構えがうかがわれます。

日本の大腸病学はとても若い学問ですが、せっかくここまで来たのですから、これからも同学の士が増え、進歩を続けていくことが望まれます。そして、今後も増え続けると予想される大腸癌、ポリープ、IBD などの解明、診断、治療に立ち向かっていただかなければなりません。そういった人たちを引きつけ、情熱をかきたてさせるに価するバランスのとれた成書が、残念ながらありませんでした。まさに、待望久しかった書の出現と言っていると思います。

本書は姉妹編である「胃疾患の X 線・内視鏡診断と臨床病理」(磨伊正義、望月福治著、医学書院、1993 年)と同じような役割を、これから大腸疾患に果たしていくことは確実です。編者らが自負されるとおり、内容的には膨大で、大腸疾患に関するすべてが盛り込まれ、熟読すればあらゆる疾患に対応できる内容に仕上がっています。

武藤・多田両氏はこれまでも数々の名著を世に問い、学術書を編集することに高い評価を得ています。執筆はそれぞれのグループの中堅、若手によってなされていて、分担本にありがちな不統一、矛盾した記述はなく、文章はこなれていて、安心して読めます。特に大腸癌(疫学、スクリーニング、臨床病理、前癌病変、表面型腫瘍、HNPPC、画像診断、

外科治療、化学療法、放射線療法)に 90 頁と全体の 1/3 近くが割かれていて、自らこの本の目指す所がうかがわれます。ポリープ・ポリポースおよびその他の大腸腫瘍はあくまでも大腸癌を補完する、という立場が与えられています。炎症性疾患も潰瘍性大腸炎、Crohn 病を太陽として他の疾患は惑星と分をわきまえています。

大腸疾患に関する診断の本は、図が沢山あり、それらが美麗で、説明は簡にして要を得ていることが求められます。「大腸疾患の X 線・内視鏡診断と臨床病理」はそういった点でわが国の類書のはるか上をいくものです。美麗なカラー写真を 298 枚、写真 167 枚、図 65 枚と、圧倒的にビジュアルなかたちで読者に訴えかけます。また類書はあれもこれも、つい trivialism にも陥りがちですが、本書は治療にも重点が置かれていて、分量的な制限が加わったことでもあると思いますが、必要にして十分な内容で非常に読みやすくなっています。

まず通読し、必要に応じて事典的に使っていけば、一流の大腸病学者への王道の書となることは間違いありません。

● B5 頁 320 図 65 写真 167
カラー写真 298 色図 4 表 73
1999 定価(本体 20,000 円+税)
〒400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)